
東方雷雨徒然録

-----二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方雷雨徒然録

【Nコード】

N4038N

【作者名】

一一一一三

【あらすじ】

純情一途（笑）の雨女と純情可憐（苦笑）の雷獣が繰り広げるしよーもない日常だったりそうじゃないものが徒然なるままに描かれた記録。この作品は東方projectの二次創作です。オリ主、キャラ崩壊、独自解釈などが多分に含まれています。それでもokという方はどうぞ。

雨、のち、雷（前書き）

永夜抄、聖蓮船以外は未プレイの上、イージーですらクリアできない作者ですが頑張ります。

雨、のち、雷

ただ、羨ましかったただけだった。彼女がある日唐突に、ちよつと旅してくると言つてはや四年。彼女は未だ歸つては来ない。そのことについて、別にぼくは寂しいとは思つていない。彼女からの連絡は週一で来るし、月一くらいペースで旅先のよくわからないものが送られてくる。ただ、ちよつとばかり羨ましくなったのだ。旅先での彼女は実に生き生きとしていて、ぼくと一緒にいる時よりもずつと楽しそうに見えたから。彼女と同じように旅をしたら、楽しいかもしれないと。

彼女に相談したら、「良いんじゃない？あんたもまだまだ若いんだし、やりたいことやれる内にやらないとさ。それに、旅先で恋人同士が偶然に出会えるとか、なんかちよつとよくね？あつた時は、そこで酒でも飲みながらしつぱりいこうや」とそれはもう軽い調子でぼくの旅に賛同してくれた。我ながら、豪放磊落な彼女である。これだから、離れていても別れる気にならないのだ。

そんなこんなで旅の準備をして、愛用の自転車にまたがり旅に出た。手始めに日本。そして、世界だ！

そう息まいた矢先のことだった。

森の中を自転車を担いで進んでいくと、唐突に現れたのは鳥居。近くに神社でもあるのだろうかと思ひ、辺りを歩き回つてみたが何も無い。不思議なこともあるもんだ、いや、ぼくが無知なだけなのか？などと思ひながらも鳥居をくぐつたその瞬間、違和感。なんだか身軽だ。

担いだ自転車が異様に軽いのだ。ふむ、どういうことだろう？

見れば、しっかりと自転車が担がれてない。残つてるのはひしやげたフレームの一部。後ろを振り向くとそこにはフレームが一部無くなつてしまつてゐる自転車。

「は？」

意味がまったく分からない。何がどうしてこうなった。いや、それよりも、ぼくの自転車……。嗚呼。フレームがこうなってしまっ
てはもう直しようがない。一応持ってきた通帳とにらめっこしよう
とバックパックを下ろそうとして、強烈な違和感に気付いた。なん
ぞね、この立派なお山は。それはぼくの胸で激しい主張をしている
お胸様だった。いやいや、本当に何がどうしてこうなった？

バックパックを下ろし、試しに触ってみる。ポヨンポヨンだった。
いやいや……。いや、しかし、これは……。触ってる内に何だか変な
気分になって来た。このお胸様は何というか、そう、我が愛しい彼
女のものよりもずっと豊か……。というか彼女のお胸様は残念ながら
この上も無く控えめで自己主張のしない、まあ、ありていに言えば
まな板だった訳ですが、兎も角、そっち触ることが多かったのでこ
の重量感は何とも新鮮。お胸様に貴賤は無いとは言え、大は小を兼
ねると言いますか、なんかもう、本当にこれはちよつとどころじゃ
なくヤバいかもしれないんだよ。

などと一心不乱にお胸様を揉んでいると、額に降って来た冷たい
何か。

「うひゃっ」

思いがけず、こっぴどかしい声を上げると共に、我に返った。

ふーむ、我ながら、何をやってるんだろうか？

まあ、何にしろ、このことは一先ずは置いておこう。降って来た
のは雨。空気が湿っているし、何より、空を見上げると見事なまで
に曇天。というか、ポツポツと降りだしてきている。ここは山だし、
天気も変わりやすい。早いところ雨風しのげる場所を探さないとい
けない。

雨宿りの場所は案外あっさり見つかった。さっきまでいた山道
を少し外れたところに、何もいない小さな洞窟があった。これは良
いと入ってしばらく、雨が止む気配が一向にない。やることも無い
し、何か暇を潰そうととりあえず携帯を取り出すとウンともスンと
も言わなくなっていた。うつそーん。いやいや、マジか。彼女の愛

しのメールも電話も、お預けですか。正直なところ、このとんでもない状況を相談したかったのだが……。

軽く落ち込むと、雨足が強くなった。存外に強くなってきた雨に鬱屈とした気分になる。

まあ、麓まで行けば、その辺はなんとかなるだろう。だが、旅に大荷物はよろしくないため、暇を潰すようなものは持ってきていない。彼女も、その辺はなくても大丈夫さ、と元気よく言っていたために、問題ないのだろうと思っていたが、この雨では何ともならない。

……揉むか？

正直なところ、この上も無いほどに魅力的な暇つぶしである。この非常事態に何をしようとしているんだお前は、という突っ込みとつか罵声が入りかねないけれどもその辺はまあ、無問題だ。理性、何それおいしいの？

ぼくは彼女一筋だが、だからこそこんな立派なお胸様を堪能できる機会なんてそうそう無いのだ。ならばこそ、この機会は逃すことなどできるだろうか？ いや、できまい！

まああれだ、基本的にぼくはエロなのだ。男の子だからね。

大粒の雫が木々や地に弾ける音をBGMにお胸様を持ちあげたり揉みしだいたりなんだり……。あーやばい。変な気分になってきた……。ところでぼくは気付いた。そう言えば、下はどうなってるかまったく確認してない。ところで、ぼくはトランス派だ。そして、内モモに感じるそこはかとなない冷たいもの。よろしい、しゃきしゃきと確認イタソウジャナイカ！

……完膚なきまでにマイサンは消えていたよ。それなりに、愛着はあったんだけれどな。まあ、それはそれとして。

気が付けば、バケツをひっくり返したような雨。おお。えーと、こんな時はどうすんだっけ？

そう、そうだ、深呼吸して落ち着こう。

深く深く身体の空気を吐き出して、深く、大きく雨の匂いのする

空気を吸い込む。

よし、落ち着いた。

空を見上げると、雨は弱くなっていた。何とも都合の良い。とはいえ、さっきまで酷い雨だった訳だから、あまり動きまわるわけにもいかないし、曇っていることを差し引いてもだいぶ暗くなっている。腕時計を見ると時刻はもう七時を超えていた。そりゃ暗くもなるわな。

とりあえず今日はここで野宿をしよう。

その日、雨が止むことはなかった。

次の日、相も変わらず雨は降り続いていた。しかし、昨日ほどではなく、小雨程度。うーん、どうしたものか。まあ、止むまで待つか。

そう決めて、四日が経った。さすがにおかしい。この雨はかなりおかしかった。どうも、ぼくの感情に呼応しているような気がするのだ。壊れてしまった自転車を見てため息を吐くと雨は強まり、一歩行為に及んでいるとバケツをひっくり返したような雨が降るのだ。この雨がなんなのかは分からないが、いささか降り過ぎではないだろうか。地盤が緩くなつて土砂崩れとかシャレにならない。自転車は名残惜しいがここに置いて、急いで下山することを決意する。体力には多少自信がある。荷物をまとめ、ぼくは駆けだした。地滑りとか起こりませんように。

とまあ、駆けだしてみたのは良いのだけれど、一向に木々が無くならない。というか、ちよつと木々が生い茂り過ぎじゃないだろうか。むき出しの木の根に躓き、雨で濡れた地面に滑り、転びながらも駆け続ける。どれ程走っただろうか、

「もう、ムリ」

いくら荷物を減らしたと言ってもそれなりに物は入ってるわけで、それなりに重い訳で。

「ちよつと休憩」

雨は、相変わらず降り続けている。広葉樹の下を陣取ってそこに腰掛ける。これは本当にちよつと降り過ぎじゃなからうか。流石にヤバイでしょうよ、これはさ。心なし、遠くからは轟音が聞こえてらっしゃる。こう、なんていうか、この音を聞くと思いたすのは地元の川が氾濫した、時の……よう……な……。あれ、これってヤバ気？ いやいや。……とりあえず、行ってみよう。

正直、気が進まない。

そうして、音の出所に行くと、案の定、氾濫しておりました。そりゃ、山中で四日も雨が降り続ければこうもなりますよねー。乾いた笑いしか出ません。

轟々とうねりを上げ、濁流となって流れている。

もし、下流の方に町があつたらシャレにならない。とは思いつけれど、どうにもできない。

まいった。この雨、弱くならないだろうか？

空を見上げた。

雨は――

「弱く……なつた？」

雨は霧雨に変わった。これで、この状況が改善されるとは思わないがさつきまでよりはましだろう。一先ずは、この危ないところから逃げよう。再び、山の中を駆けだす。

それから合間合間に休憩を挿みつつ、ぼくは駆け続けた。

その間、一向に雨は上がらず。

――一つとして民家を見ることが無かった。

おかしい。おかし過ぎる。いくらなんでも民家が無さ過ぎじゃないのか？ 休憩を挿んだとは言え一軒や二軒はあるもんだらう？

それから二昼夜、移動を続けようやく見つけたのは小さな小さな

集落。小さな水田に、竪穴式住居という光景。何度目を擦っても、目頭を押さえても、広がる光景は、学生時代に歴史の教科書に出てくる光景だった。

「は、はは」

視線を少しずらすと列を成して集落から離れる布切れのような簡素なつくりの衣服に身を包んだ人々。集落の側を通る川は、今にも氾濫しそうだった。

……今、目の前に広がっている状況が本当かどうかはさておき、あんな小さな集落では川が氾濫なんかしたらひとたまりも無いだろう。雨はぼくのせいではないはずなのに、なんだか申し訳ない気がする。のはなぜだろう。このなんとも言えないもやもやとした感じ。なんとまあ、ままならない。

山を下りて集落へ向かう。相も変わらず雨は降り、現在はいじとじと嫌な感じに降っている。やはり、どこかぼくの感情に呼応しているような気がする。とにかく、氾濫してしまう前に一度、集落を確認しておこう。

集落に着くと、そこは実に生活感あふれていた場所だった。竪穴式住居に入ると厚手の土器のカメには四分の三ほど水が張られていたが、他のカメにはほんの僅かばかりの米や木の実しか残っていなかった。収穫前だったのか、逃げる際に持ちだしたのか。それは分からないがおそらくこの集落を放棄してしまったのではないだろうか。

ちよつと、話をしてみたかったな。

空を見上げると、曇天は更に暗くなり、雲の隙間から閃光が漏れだす。それに従い、強くなる雨。ただでさえ悪い天気が更に悪くなりそうな感じ。これ以上雨を降らしてどうするんだ。お天道さんは気でも狂ってしまったんだろうか？

そんなことを思ったその時、雷光煌めき、雷鳴が轟いた。

「うひゃあっ！……！」

轟音と悲鳴。

つまるところ、稲妻が目の中の縦穴式住居に落ちた。いや、本当にシヤレにならない。茅葺の脆い住居は雷によって燃え盛る。そして、炎の中に揺らめいた影。雷鳴にやられてしまった耳を押さえながら目を凝らす。

そこから出てきたのは、だらしなく着流しを羽織ったよく知った顔。ただ、ぼくの記憶と大きく違うのは頭に生えた猫ともつかない丸みを帯びた三角形の獣耳に豊かでふさふさな二本の尻尾。

「この辺でやたらと雨を降らしてんのはお前だな、雨女」

それは、確かにぼくの彼女であるところの藤野彩鳴だった。間違いようもなく。

少し釣り上がった大きな瞳も。

形の整った小さな卵型の顔も。

自己主張に駆ける小さな胸も。

然程大きいとは言えない背も。

少女のように華奢な四肢も。

とても三十路を越えているように見えないその容姿は、本当に何も変わってはいなかった。

距離にしておよそ二メートル。ここからでも分かる彼女の匂い。

四年ぶりに嗅いだ彼女の匂い。

見て、触れて、嗅ぐことのできるこの幸せ。

正直なところ、電話やメールじゃ物足りなかった。

四年間という期間は、この再会に何よりのスパイスを与えてくれる。

予想外の出会いが、感慨を与えてくれる。

「サイメイ!!!」

ぼくの年上の彼女。

一歩踏み出して。

それ以上進むことが出来なかった。

バチツ、という音と、焼け焦げた焦げた足元の地面。

手のひらを向けた彼女は言い知れない威圧感を纏い、ぼくを見ている。

「え、あれ？」

あの顔は、怒っている時の彼女だ。怒っている時は、顔から感情が消える。それを越えると笑いだすからまだ、大丈夫だとは思っているけど、怒っていることには変わらない。

「サイメイ、なんで？」

彼女から返って来た言葉は、実に彼女らしく、ぼく自身、失念していたことだった。

「何で、サイメイの呼び名を知っている？ その名で呼んでいいのはワタシの彼氏だけだ。何より、その胸が気に食わん！！」

……ですよねー。今のぼくは間違いなく身体が女性であり、彼女が分からなくてもしょうがないことではある。

どうしよう。打開策が見つからない。

何より、現状がそれを許してくれない気がする。

「本来、今日ここで川が氾濫する予定はなかった！ 大いに癪だが、お前の討伐依頼がきた。悪いな」

なんとというか、シャレにならない。いや、でも、彼女は話の通じる人だ。

「ちよつと待って！ ぼくは倉藤雨季だ！」

「嘔吐くな！！ 私の雨季は可愛いし、男の娘だけど、たとえば、雨季が実は女だったとカミングアウトしたとしても、間違いなくそんな脂肪なんてない！ あるわけない！」

……え、何それ。初耳なんですけど。可愛い？ 男の娘？ あ、の、ぼく、可愛いつもりも、男の娘のつもりもないし、言われたこともない。事実として、ぼくはそこそこに身長はあつたと思うし、女になった現在でも、そんなに身長は変わっていない。生憎、男の娘の要素は皆無だ。

「ちよつと待って！ なんかおかしい！ サイメイはぼくをそんな

風に思ってたの？　むしろ、サイメイの方が可愛いし、女の子だし、男前だし、可愛いし、何より、ぼくの憧れで、って言うか、女になつた上にタイムスリップ的な何かが無きにしも非ずな感じで、不安だらけのところに、まさかのサイメイで、ぼくはもう意味がわからないというか、訳が分からないというか、不安で不安で仕方ないというか、自転車はお釈迦になるし、女になるし、訳の分からない雨は降るし、川は氾濫するし、全然山降りれないし、数日かけて降りたら降りたで弥生時代みたいな集落だし、川の氾濫で集落捨ててるし、教科書でみた光景が広がってるし、雷落ちるし、サイメイ出てくるし、四年ぶりで嬉しいし、でも、サイメイが分かってくれないから悲しいし、でも、ぼくはこんなになっちゃったから、分からないのはしかたないし、あー、もー！ー！！」

言っている内に、感極まったり、安心したり、愕然としたりと、なんだか訳が分からなくなってきた。散々不安になつていたところに、彼女が、ぼくが誰よりも信頼している彼女が現れたのだ。それなのに、彼女はぼくをぼくと認識することが出来ない。そのことが何よりも辛い。それどころか、討伐とか、男の娘とか言っているのだ。

もう、訳が分からない。

「とにかく！　ぼくは倉藤雨季だし！　藤野彩鳴の彼氏なんだ！！」

この時、ぼくの許容量は越えていた。そう断言するので精一杯。目から汁が出ている気がする。断じて涙なんかじゃない。心の汗なんだ。

対する彼女はぼくの剣幕に無表情を崩し、怪訝そうにぼくに近づいてきた。

何だろう？

彼女の言葉は。

「タイムスリップ？　ちょっと、詳しく話を聞かせてもらってもいいか？」

さっきまでとは違う、声。困惑と驚愕と、不審。

それでも会話できることが嬉しくて、ぼくは目から出る汁を拭い、「うん」と頷いた。

無事な竪穴式住居の中、ぼくと彼女は向かい合わせで座っている。

「では、質問です」

まるで、会社の面接のようです。

「あなたの名前は？」

藤倉雨季。

「年齢は？」

二十五歳。

「性別は？」

おと……いや、今は女……になるのかな？

「君は何の妖怪？」

え、妖怪？ ぼく、妖怪なの？ 人間でしょ？ え、違う？

「能力は？」

能力って何？

「どこから来た？」

〇〇県××市 町2-8-22からだよ。知ってるでしょ。

「……どうやってここに来た？」

自転車と徒歩。そもそもここはどこ？

「今は、何年の何月何日？」

ぼくが覚えている限りでは20××年の〇月 日だけれど、ぼくが見た光景は少なくとも紀元前300年前後のものだと思うんだけれど……。

「なぜ、ワタシを知っている？」

なぜもなくそも、ぼくは倉藤雨季で、藤野彩鳴の彼氏だからだよ。

何度も言っているじゃない、信じてよ！

「なら、ワタシと雨季の出会いはい？」

そんなこと、昨日のことのように思いだせる。五年前に、お兄ちゃん、と言う言葉を叫びながら、ショッピングモールで抱きついてきて、ナンパを回避。迷惑かけた詫びだ、ということではくを飲み屋に連れ去り、酔っ払った勢いで、ぼくをおいしくいただ――。

「まった。もういいから。それ以上。言わないで。……我ながら、酷い馴れ初めだよ、本当に」

がつくりと肩を落とした彼女は、ぼくの頭に優しく手を置くと「そっか、雨季もここに来たのか」。そう言った彼女の目に浮かぶ涙。「サイ……メイ……？」

彼女が語りだした話をあまりにも荒唐無稽で、でも、今我が身に降りかかっていることそのものでもあった。

それは、一人の女性の話。

女は旅をしていた。故郷に大事な彼氏を残し、世界中を廻っていた。時には笑い、時には泣き、幾度の修羅場を乗り越えて。

そんな折、最愛の彼から連絡が来た。

自分も、旅してみたいと。

女はそれを促した。世界は広い。彼氏はまだまだ若い。見識を広めることは大事だ。

そして、そこから生まれた夢。少女のような、青臭い夢。

旅先での偶然の再会というロマンス。

旅は、ますます楽しいものになった。

そんな矢先に、それは起こった。

森の中での野宿。目が覚めると、森の植生が寝る前と変わっていた。

おかしい。

その思いと共に歩いた女は辿り着いた川で神と出会った。

神は言う。ふむ、先ほど生まれたのはおまえだな、神鳴る神よ、

と。

そして、こうも言う。神鳴る神よ、お前は人をおそれさせる妖しき怪異でもあるのだな、と。

神は、女におもしろいからこの地を治めると仕事を押し付けた。

女はその際に色々なことを教えてもらった。神のこと、妖怪のこと、力のこと、能力のこと。

女は、やるしかなかった。

教わる過程で、自らが神話の時代にいることを知った。

もう、彼氏とは会えないことを悟った。

そのことを考えないように、女は頑張った。頑張り過ぎた。

女には向いてはいなかった。

治めるには、あまりにも女は未熟だった。

土地に変化がまったく起こらなかった。

現状維持。

それはそれで、よく治めているとは言えたが、それは神が求めていることでは無かった。

だから、神は再び土地神へと返り咲き、女は神の御使いとなった。

そして、神の言葉に従い、女は世界を回し始めた。

長い、永い時が経ち、女は、能力故に神々の中でのトラブルキーパーのような立場を手に入れた。

ある時、ある神から依頼が来た。

起こるはずの無い川の氾濫が起きている。どうも、雨女が現れたようだ。生憎、別件で忙しいため、代わりに討伐してきて欲しい、ということだった。

しぶしぶ、向かった女は、女の彼氏だと主張する雨女と出会う。

それが、女と彼氏の再会だった。

彼女は涙を流して、ぼくを抱きしめた。

「もう……二度、と……会えない、と……思……た……」

彼女は嗚咽に言葉を詰まらせた。

彼女は言っていた。十年二十年なんてものじゃない。百年、千年という単位で、ぼくとの再会を夢想し、半ば、諦めていたのだ。それが、そうじゃなかった。夢想は今を以て現実に変わる。それは感動となって、彼女の心の中を駆け巡っているのだと思う。

彼女はあまり泣かない人だった。

「……え、へへ……涙、止まない……は、恥ずかしいな……」

年上だからか、ぼくに弱みをあまり見せてはくれなかった。

「ほ……に……うねっ、……し、い……」

ぼくも、嬉しい。

そつと、彼女の身体を抱き返す。

——嗚咽が、止まった。

……あれ、おかしい。さっきまでの感動的な雰囲気完全に消失している。

そうして、ぼくの胸元から迸る強烈な威圧感というかむしろ殺気ですね、分かります。

彼女の手の平の中にはぼくに突ってしまったわなお胸様。

「
…
ん
ん
っ
」

突然揉み出すものだから、我ながら相当なエロい声が出てしまった。

再び降りた沈黙。

そして――。

「汚物はっ！消毒だ——っ！！！！」

「いやああああああああああああああああああああ！」

そこから先の話は、あまり語りたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4038n/>

東方雷雨徒然録

2010年10月8日14時00分発行